

山崎町文化

'86-2*No.5



山崎町文化連盟編集発行

機関誌「やまさき文化」第五号発刊に際して

山崎町文化連盟会長

壺阪 壽



やまさき文化もとうとう第五号を発刊することになり、同慶の至りであります。

然し乍らその間に編集に携わられた方々の御努力に対しては、心から厚くお礼を申し上げます。

昨年度中も山崎では、実に色々な文化行事が行われてきました。中でも十一月に開催致しました、郷土出身の生沢朗画伯の遺作展は、多くの町民の共感を得ました。そして亦、本年も昨年にもまして文化活動が展開され、それによって山崎町内の皆様が、一層参加と連帯の意識を深められることと思えます。

どの町にもそれぞれの文化活動がありますが、吾々の町山崎にも伝統ありそして広い基礎を持つ文化活動があり、それが山崎という地域社会を造ってゆく上で大きな意味を持つものであります。そういった意味からも、その機関誌である、「やまさき文化」が更に号を重ねてゆき、同時に内容も一段と充実したものなることを念ずると共に、この小冊子が山崎の文化発展の先駆的役割を果されんことを切望いたします。

やまさき文化

★目次★

「やまさき文化」第五号発刊に際して

壺阪 壽 2

西南の役異聞 林 沙鷗 3

さくら随想 根岸 元彦 8

「各部寄稿」

生沢朗画伯遺作展を省みて、和田 秀男 11
一年の回顧

歌話会の詠草から 松本寿賀子 13

さつきづくりについて 井口 隆吉 16

郷土研究会のあゆみ 堀口 春夫 17

最近テレビをみて感動したこと

本條 衛 18

聖徳太子 朱山 毅 18

文化会議に出席して 塚本重郎兵衛 19

能について 森下 琢郎 19

古典舞踊 坂東寿江子志 20

祐助氏を偲ぶ 福岡 久蔵 20

新潮会と文化 菅原 柁夫 21

全日本チャンピオン 高野 圭介 21

冬偶感 谷川 柳秀 22

こごみ 北川 泰子 22

詩心 田口 實 23

心の自然 田中 健一 23

編集後記 根岸 元彦 24

表紙題字／尾崎正一 カット／横江柏峰
表紙紙画 山崎城跡紙屋門／横江柏峰

西南の役異聞

山崎文学会 林 沙 鷗

明治十年の一月もおし詰まった或る寒い日、内務・大蔵の合同庁舎の中の奥まったところにある豪華な内務卿室で、余人を排して二人の男が顔を寄せ合うようにして密談を交していた。揉み上げから顔にかけて濃い髭を蓄え、射る様に鋭い瞳の人物は、西郷が下野のあと、今や政府最高の実力者大久保利通である。

もう一人の、額の広い精悍で引き締まった顔の人物は、大警視川路利良で、大久保の腹心と言われている。

彼は最近、大久保の命を受けて欧米の警察制度を視察して帰ると、従来の機構を廃して、新しい警察制度を創設したばかりである。そして自らは大警視としてその権限を一手に握っていた。

密談の内容と言うのは、最近、鹿児島に送り込んだ密偵団からの報告にもとづいて、新たに指示を与える暗号電文の内容についてである。

九州各地に相次いで起きた不平士族の騒乱に刺激されて、騒然となった鹿児島

の情勢は、政府にとっては放置で来ぬ事に立ち至っていた。

征韓論にやぶれて鹿児島に帰った西郷は桐野武秋、篠原国幹らと共に私学校を創立すると、子弟を教育して、県庁、諸役所、警察署と言った行政機関は、県知事以下総てを私学校党によって占め、全国でも、この県だけは政府への地租も無視して、さながら、ここに鹿児島県王国をつくっているかの観があった。

ここでは廃刀令も通用せず、政府による県知事の任命も受けつけず、士族は旧態依然として髪を結び、刀を帯びて歩いていた。

この有様は、中央政府から見れば誠に厄介な存在で、見過して通るわけには行かなかった。

西郷が下野の後、大久保は、欧米視察によって得た知識をもとに、新たに伊藤博文、大隅重信らを参議に任命して体制を建て直し、鉄道、通信の施設を拡めて、殖産興業に務め、百姓、町民からの徴兵

による兵制の確立と、¹⁾国家建設に向かつて、着々とその実を上げていた。

しかし反面、未だに藩に代わって食禄を与えなければならぬ士族階級が存在は政府の財政にとっては余りにも大きな負担であった。これを解決しなければ、日本の財政は立ち行かないのである。

職をなくした士族の不平不満は、全国に満ち満ちている。その中でこの問題に満ち満ちている。その中でこの問題解決は、至難を極めた。

明治九年三月、廃刀令に続いて、八月には金禄債券の発行条例の公布が行われた。今迄、米によって支給されていた士族の禄を廃し、金に換算して、六年ないし十年の公債を発行し、その後は廃止すると言うのである。

この条例は、ただでさえ職を失って困窮している士族を、著しく刺激した。

これを契機に、十月二十四日には神風連の乱、二十七日には秋月の乱、二十八日には秋の乱と相次いで不平士族の反乱が続発して、世上は騒然とする。

だが、それらは悉く鎮台兵によって短時日の中に鎮圧されてしまった。騒乱に加担した首謀者達は、自ら現地に乗り込んだ大久保らによって裁かれ、その首をさらされた。

この事は、新しい近代国家建設を目指す大久保にとっては、止むを得ぬ処置であったとは言え、多くの士族の憤激を買

う結果となった。

最後に士族が頼みとするのは、西郷一人である。

九州の情勢が不穏になるにつれて、首都の言論界も次第に揺れ始めて来た。

当時、在京の日刊新聞は「郵便報知」、「曙」、「朝野」、「東京日日」、「読売」と賑々しく政府の施策を痛烈に批判し、中でも、「中外評論」の政府攻撃は、激越を極めた。

これは、主宰者海老原穆なる人物が桐野武秋の子分であるからである。いくら記者を検挙しても、後を絶たないのである。警視庁が、その背後に西郷、桐野ありと睨むのも無理からぬものがあつた。川路は切歯扼腕した。

遂に大久保は、秘かに川路利良を呼んで、鹿児島県の情勢をさぐる為、密偵団を送ることを命じた。

川路は、警視庁の警部、巡查の中から薩摩藩出身の元士族、二十三名を選んで鹿児島に向かわせた。彼等は休暇と言う名目で秘かに東京を出発し、途中で目立たぬ様に別れ別れになって鹿児島に潜入したのが、大体、明治十年一月六日から十五日の間である。

責任者の中原尚雄は、鹿児島を北方に離れること三十キロ程の所にある伊集院町の或る町家の貸家を借りた。何故この地を選んだかにも理由がある。

それは内務卿大久保の近代化路線に沿って、全国にめぐらされた電信施設が九州は未だ熊本迄しか来ていなかった。その為、政府からの暗号電文が熊本止まりになる。そこで、成る可く熊本に近い所と言うので伊集院が選ばれたのである。大久保は既に今日あるを見越して、電信網の創設を急いだものと言われている。

密偵団からの報告によって、反乱必至と見た政府は、自らが育てた三菱商会の汽船、赤竜丸をチャーターすると、一月二十九日を期して、鹿児島周辺の武器庫から弾薬を撤去する様、陸軍に命じた。

武器、弾薬の撤去が始まれば、鹿児島的情勢は暴発することは間違いないと見なければならぬ。

政府は密偵団からの刻々と推移する危険な情勢報告が、喉から手が出る程、ほしいのである。その報告によって、事態に遅れぬ様、新しい指令を密偵団に送らねばならぬ。

話は、再び内務卿室にもどる。
長い密談が漸く終わると、一通の電文の草案を見ながら川路が言った。

「それでは、閣下、この暗号電文を伊集院に発信します」

短い言葉ではあるが、深い熟慮の末に最後の決断を下したと言った語調が含まれていた。

長い密談の疲れと、高ぶった感情のた

めか、さすが、剛気な川路の顔も上気し、声もしわがれていた。その暗号の意味の重大さが、わかり過ぎる程わかっていたからである。

「やむを得ぬだろう。弾薬の撤去も命じたことだし、あとはなる様にまかせるしかないまい。」

さすがに大久保は落ち着いていた。しかし、顔には川路がかつて見たことのない様な沈痛な表情が浮かんでいる。

密談が終わって、川路は去ろうとしたが、そこで一寸立ち止まると、

「閣下、若し鹿児島が暴発する様なことがありましたら、この度は是非、私にも出動させて下さい」

目に余る野党新聞の政府に対する誹謗の陰にある者への怒りでもあった。

「そうあって貰いたくないとは望んでいるのだが、万一、その様な事態になれば、今度ばかりは、貴君にも行ってもらわなければならぬだろう」

川路は、このことを大久保にひそかに期待していたのである。彼は感激した。

「はっ、身の冥加に尽きます」
西南の役では、彼は別働第三旅団司令長官として陸軍少将の肩書で参戦し、かの軍歌で有名な決死の「抜刀隊」を編成して、赫々たる武功を立てるのである。

一方、鹿児島に潜入した密偵団は必ず

しも隠れてはいなかった。彼等は、反私学校党の者を同志に入れ、私学校党の切り崩しを狙っていたのである。

それを知った私学校党では、警視庁の元巡查・谷口登なる者を逆スパイに送り込んだ。彼は故あって巡查をやめ、郷里の鹿児島に帰っていたのである。

彼は、ひそかに伊集院町の中原尚雄を訪ねる。

「私は郷里に帰っていましたが、私学校党には入っていません。私達はお互いに昔は軽輩、今の西郷の行き方には同調出来ません。どうか私も仲間に加えて下さい」

と、言葉巧みに取り入った。中原とは警視庁では元同僚である。

谷口の言葉をすっかり信用した中原は彼を密偵団の一員に加えて、各密偵の名前、所在から暗号まで教え、問題の電文を見せる。

「ボウズ(坊主)ヲシサツ(刺殺セヨ)」
そして坊主とは西郷であることを告げる。驚いた谷口は、それを桐野武秋らに知らせた。

時を同じくして、挑発するかの様に政府は鹿児島周辺の武器庫から弾薬の撤去を始めた。犬迫火薬庫からである。

火薬の移動には県令の許可のもとに、昼間赤旗をつけて移動しなければならぬ規則だが、夜間極秘裏にである。私学

校党は言うに及ばず、附近の住民も怒った。

明治十年一月二十九日、憤激した私学校党は、遂に草牟田火薬庫から磯、上之原の火薬庫へと、つぎつぎと襲撃して弾薬を奪った。

騒然とした鹿児島を離れて、大隅半島の南端に近い小根占にいた西郷は、その襲撃を聞いて怒った。政府の挑発にのつた愚を嘆いたのである。実弟の西郷小兵衛に次いで辺見十郎太の迎えて、西郷は重い腰を上げて、小根占を立てて鹿児島に帰って来た。二月三日である。

その頃、逆スパイ谷口の偽手紙で誘い出された中原は、伊集院町の橋の上で捕えられ、芋蔓式に全員が捕縛されて、さまざま拷問の末に全てを白状した。

さきの暗号電文を知った西郷は激怒して、全員の処刑を命じた。

因みに、その時の暗号を列記すると、私学校党は一向宗、西郷隆盛は坊主、桐野武秋は鯨節：等々、人を使ったものだった。

色が黒くて長い顔の桐野武秋が、それを知って苦笑したと言う話も伝わっている程である。

密偵団の逮捕、火薬庫襲撃事件と重なり、切迫した事態に迫り込まれた西郷以下幹部は、私学校党の大講堂に二百人余りの者を集めて、今後の対策について議

論を戦わした。

激昂した生徒達は口々に兵を挙げることを唱えた。永山弥一郎や村田晋介は自重を促したが、いきりたった彼等を鎮めることは出来なかった。

最後に、篠原国幹が、

「政府が密偵団を送って、先生の暗殺は謀つちよるに、何を躊躇することばかりもんぞ」

と言うのに続いて、桐野が西郷に断を求めた。

それに対して西郷は、ゆっくりと腰を上げると、徐ろに口を開いた。

「何も言うことはなか。おはん達の良か様にしてたもんせ。この体ば、おはん達に上げもそう」

かくして、西南の役の戦いの幕は切つて落とされたのである。

この戦いに入る前に、西郷と言う人はいったいどの様な人物であつたかを此処で是非とも振り返って見る必要がある。

先ず、彼が五尺九寸五分、体重三十九貫の巨体で、余り口数は多くなかつたと言うことである。

当時、イギリス公使館に滞在していた、「世界周遊記」の著者である英人のピュ一ブナーは、その著書の中で、

「西郷は、ヘラクレス（ギリシヤ神話に出てくる怪力無双の英雄）の様な体つき

をしている。その眼は知性にあふれ、その容貌は活力に満ちている。無造作な身なりをしているが、どこか軍人の雰囲気漂わせている。その物腰は地方に住む貴族を思わせる。彼は中央政府の高官の生活には飽き飽きしている」

と述べている。 たまたま、西郷ら政府高官達との宴席で会つた時の印象である。之の席でも口数の少い西郷の語つたことと言えば、一刻も早く故郷へ帰りたと言つたことだけらしい。

高給をむさばり、西欧の真似の様な官僚生活が我慢出来なかつたのである。

しかし、反面、自分の信念を述べる時は、周囲も憚らず、断固として自分の主義主張を通した。そうした時は周辺は、唯、畏怖した様に黙した。

その代表的な例が二つある。一つは廃藩置県であり、他は征韓論の時である。

前者の場合は、当時、各藩の大名はその版籍は奉還していたが、それは名のみで、実権は依然として藩主（藩知事と名は変わつていた）とその士族にあつた。

そのため、政府では藩を廃して全国統一の県にしたいのだが、各藩の反対、引いては新政府の崩壊につながるとして、その実行を危ぶんだ。その時、西郷は大声一番、

「その時は、おいどんが率いて、その藩を打ちつぶすぞ」

と言つと、その一言で忽ち議論はやんで廃藩置県は無風の中に行われ、名実共に新政府の基礎が確立されたのである。

後者の征韓論の場合は、その大声は激越を極め、しかもその大声は、西郷の最後のものとなつた。

西郷は、士族と言うものが、文武共に最も優れた階級であり、それに対して郷愁の様なものさえ抱いていたのではないかとさえ思われる。

事実、徳川三百年の幕藩体制を支えてきたものは士族であり、又、維新の大業をなし遂げたのも士族である。新政府が樹立されたからと言って、士族を廃して財閥を育てて殖産興業に務め、一般市民からの徴兵による軍制をしつと云うことは、心情に温かい西郷には、到底出来なかつた。時に冷酷さを必要とする政治家には彼は不向きな人間であつたらしい。

その点、大久保は違う。木戸孝允程の急進さはないが、漸進的に徴兵による中央統一の兵制を考えていた。

この頃から、大久保と西郷の間に微妙な路線の違いが見え始める。大久保は英国に見做つて資本主義による貿易立国を目指し、殖産興業に務め、大資本、大財閥を育成した。岩崎弥太郎を見込んで、後の三菱財閥を育てたのも大久保である。

後年、この財閥が、各戦役で大きな役割を果たすことになる。

反対に清廉潔癖な西郷は、金銭のまつわる商人との交りは好まなかつた。彼は絶えず、友人知己への書簡の中で、新政府に於ける官吏の金銭的な墜落振りや、軽薄な欧化を痛烈に批判している。

西郷はこの様な官僚政府よりも、没落して行く士族に、もう一度活力を与えて武力による日本の統一を望んでいたのである。

岩倉、大久保らの欧米視察中に、民心殊に士族の動揺を鎮めることを目的とした関西巡幸があつた時、その留守中に薩長土藩の士族の精鋭からなる近衛兵が、兵部省を非難、攻撃する事件があつた。兵部省と言へば、百姓、町民から徴兵した鎮台兵を統轄するところである。この事件も明らかに徴兵による軍隊と士族が相いれざるものであることを表わしている。

このため、巡幸に従つていた西郷が呼び返されて、彼の鎮撫によって騒ぎはおさまつたのである。西郷への士族の信望が如何に厚かつたかが、よくわかる事件でもある。

しかし、士族の家禄を藩から肩がわりして財政的に大きな負担を背負われ、尚、その士族を漸進的に廃止しようとする維新政府にとっては、西郷の存在は両刃の

劍の様な存在であった。

西郷は、この士族の不平、不満の口を征韓論に向けようとしたのである。

そして、ここに、盟友大久保と決定的な対決をすることになる。

無口な西郷は、大声を張り上げて大久保と征韓論をたたかわした。太政大臣・三條実美が顔面蒼白となって卒倒する程である。

この会議は十四日から始まって、二十三日に漸く決着を見た。一度は征韓論に傾くかに見えた閣議も、策士大久保の必死の巻き返しによって逆転する話は、余りにも有名である。

その様な西郷ではあったが、その巨体に似合わず、細やかな神経と、虐げられた者達への温かい精神の持主でもあった。その代表的な事件が僧月昭と日向に逃れる船上から冬の海に入水する心中事件である。

幕吏に追われて、月昭が京都から肥前薩摩へと逃れて来た時、それ迄は好意的であった両藩も、硬化した幕府を恐れて手のひらを返す様に月昭を見捨てて退去を要求する。

在京中は共に勤皇の志士として公卿との折衝に助力してくれたこの白面のか弱そうな僧を見捨てることは、西郷は出来なかった。

しかし、幸か、不幸か、月昭は死に、

西郷は九死に一生を得て大島に流される。後年、月昭の十七回忌に、次のような詩を賦している。

相約して洩に投ずる後先なし
豈、凶らんや波上、再生の縁
頭を回らせば、十有余年の夢
空しく幽明を隔てて墓前に哭す

こうした事例は、西郷には数限りなくある。

又、彼が勝海舟や山岡鉄太郎らと腹を割った話し合いで、江戸城の無血開城を行ったが、その後も尚、彰義隊が上野の寛永寺にたて籠った。

これに対して、西郷は、ただ徒らに傍観するのみで、何ら手を打たなかった。業を煮やした京都の朝廷では、遂に大村益次郎を派遣して、指揮を大村に任せて彰義隊の攻撃を行った。

近代的な用兵と戦略に詳しい大村は、戦火を上野一帯に限って、災害を他に及ぼさぬ様にして、緻密な計画のもとに、殆ど一日の戦いで彰義隊を掃討している。

西郷の面目は丸つぶれである。これは勝海舟や山岡鉄太郎への義理立てと、滅び行く士族への同情の様なものがあったのではないとも言われている。

この様な事例は、その後も北越戦争や函館戦争などに於いても見られる。後世の史家から、西郷は政治家にもなりきれ

ず、軍人にもなりきれなかったと言われる所以である。

彼は、むしろ、教育者に近い立場にあったと言う方が適切な様である。

江戸城に移られた頃の明治天皇の人となりは、恐れ多い話だが、大変な腕白でしかも若いに似合わず大酒家で深酒をされた。柔弱な公卿の間に育たれた悪癖である。養育係も、その養育に当たっては手心を加えて遠慮申し上げる。

この有様を憂慮した西郷は、江戸開城でその人物を知った山岡鉄太郎を、養育係に任命した。慶喜の側近を理由に、洪る山岡を引き出した西郷の功績は大きい。

劍の道で心技共に円熟期にあった山岡は、その訓育に当たっては、天皇と言えども、常人に対すると少しも変わらなかつた。天皇が明治大帝と仰がれ、世界でも稀な英主となられた素地は、この頃に培われたのである。

後年、西南戦争は避けられないと言った風評が立ち始めた頃、明治天皇は、ひそかに山岡を、西郷のもとへ遣された。

唯、「顔を見て来い」と、言うだけのことであった。

鹿児島に赴いた山岡は、共に温泉にひたつて、西郷の肩を洗い流した。西郷は、その叡慮の深さに涙を流すばかりであつたと言うことである。

私学校党が大講堂で拳兵を決定したのが二月五日。それから八日後の十三日には、早くも一万三千の軍隊を編成した。

翌十四日は、南国には珍しい五十年振り的大雪であつた。

集まつた生徒達は、「縁起のよか雪じゃ」と、士気を鼓舞した。

陸軍大将の制服に身を包んで、馬上に跨つた西郷の前で、閲兵式を行うと、その後、順次、熊本を目指して北上を開始した。

これを伝え聞いた政府では、直ちに征討総督に有栖川宮熾仁親王を戴き、参軍に山県有朋、総督補に川村純義を任じて、第一旅団(司令長官・野津鎮雄)第二旅団(同・三好重臣)を編成して九州へ向かわせ、ひき続いて第三、第四旅団、別動第三、別動第四旅団と陸統として、武器、兵員を送つた。勿論、その輸送には三菱商会があたり、政府と各鎮台と大本営(熊本の北方十四里の所に設けられた)とは、高度な暗号による電信で連絡されていた。

総てが、この日のために用意されていたのである。

政府軍の服装は、草鞋こそはいているが、黄色いベルトの入つた軍帽に、紺の制服、白い脚絆と言つた様に整然と統一され、武器は全員に最新式のスナイドル

銃が支給されていた。

それに引きかえ、薩軍の服装は、旧陸軍のものや海軍のもの、或いは筒袖に股引と言った様にまちまちであり、武器も又、旧式のエンピール銃が主力であったから、戦いの帰趨は、自ずから明らかであった。

東京の大久保が、工部卿伊藤博文に送った書簡の中で、内乱の勃発について、
「誠に朝廷不幸中の幸いと、ひそかに心中には笑を生じ候くらいにこれあり候」と、樂觀的な見方を述べているし、戦役中、初めての内国勸業博覧会も、周辺は一時節柄、遠慮をしては——
との進言にも

「こんな時こそ、民心を安定させるため行わなければならない」と、自ら総裁となつて開催し、余裕のあるところを見せている。

二月十五日より大挙、鹿児島を發進した薩軍は、二月二十一日に熊本南方に到着。翌二十二日から熊本城の攻略にかかるのだが、政府軍の方も、同日早くも第一、二旅団が、神戸から船で博多に上陸して南進を開始した。

熊本城を前にして、曾て、この城の司令長官を務め、城の事情を熟知している桐野武秋は、

「こげん城を落とすには、い・ら・さ・ば・一（物干竿）一本で十分でござす」

と、豪語した。鹿児島に下野して時勢の推移に遅れた桐野は、彼等との力の差に氣付かなかつたのである。

この時に備えて、陸軍では籠城戦に強い谷干城少将を、かねてより司令官に任命していた。期待に違わず、人の和と忍耐を身上とする谷干城は、見事に將兵を指揮して薩軍を寄せつけなかつた。

その間に南下して来た政府軍は、高瀬を中心にして初めて薩軍と遭遇し、全面的な戦闘に入る。

結果は、局所的な戦闘には勝つても、相互の連絡に欠けた薩軍は自らの体制を維持することが出来ず、敗退するのだが、ここで政府軍は、一気に進撃せず態勢の建て直しをはかつた。

その僅かなすきに、薩軍は後方の長さ二キロばかりの田原坂を要塞化してしまつた。熊本への道は他にいくらでもあつたが、大砲の通る道は、ここしかない。この戦役の天王山とも言うべき激戦が、この田原坂に起きたのも必然のなり行きであつた。

戦いは、三月四日に始まつた。

その年は、不思議に雨の多い季節で、冬の終わりの冷たい雨は、戦場を掩つて泥にまみれた兵士の肌身をさした。

前込式の薩軍の銃は雨に弱かつた。それでも彼等は抜刀突撃と銃撃を交えて、政府軍を食い止めた。その日から二十日

迄、実に、十七日間にわたつて昼夜の休みなく泥濘の中の死闘が繰り返された。

突撃を繰り返す毎に政府軍は、頑強な薩軍の抵抗の前に多大な損害を蒙つて、総崩れとなつて敗退した。

弾薬の乏しい薩軍は錫、青銅、鉄などで、即製の弾を作つたり、落ちてゐる弾丸を拾ひ集めて使つた。

政府軍の一日平均の弾の使用量は、小銃弾が、実に三十二万発、砲弾は一千発に到達し、累々と横たわる死体は、路傍の石と変わらなかつたと言われている。

しかし、さしも激しかつた薩軍の抵抗も熊本西部海岸・日久奈に上陸した別動第一旅団の衝背軍による背後からの攻撃に遂に崩れ、ここに薩軍は全面的な敗北を喫して、南方の人吉に一時集結する。

ここも二ヶ月足らずで追撃して来る政府軍の前に、あえなく敗退し、これから北方に宮崎・延岡と逃れ、更に俵野の溪谷から可愛岳を越え、再び南方に向かつて死の彷徨が始まるのである。

時に八月十六日、既に兵力は僅かに七百名を残すのみとなつていた。

可愛岳を越えたところで、偶然、眼下の菅野に第一、二旅団の本營を發見する。ここで勇躍、抜刀突撃を敢行して、これを潰走させ三田井に到着。ここでも政府軍の倉庫を襲い、米良、栗野と九州の屋根と言われる山中を鹿児島に向かって南

下した。

蒲生の山中を過ぎた頃、誰からともなく口々に、

「煙が見えもんす」
「桜島じゃ」

と言う声が上がった。

遙か南の空とも海とも見分けのつかぬところに、煙を噴く懐しい桜島が浮かんで来た。

ようやく故郷に帰つて来たと言ふ嬉しさと懐しさが、涙と共に実感となつて湧いて来た。

鹿児島を出発してから、実に二百日の月日が流れていた。頬をなでる風にも既に秋の氣配が感じられる。

一万三千の精兵も今は僅かに五百を余すばかりで、弾薬は尽き果ててしまつてゐる。死の彷徨の一百の里程は正に敵壁の間であつた。

しかし、今、眼前に浮かぶ桜島の少しも変わらぬ悠然とした噴煙の姿を眺めてゐる中に、性癖となつた詩の構想が、西郷の胸中を去来した。

孤軍奮闘、囲みを破つて帰る
一百の里程、壘壁の間

我が剣は既に折れ、我が馬は斃る
秋風、骨を埋む故郷の山

薩軍、城山に拠るの報に驚いた政府軍は各戦線から急拠鹿児島に向けて集結し

た。総勢八ヶ旅団である。

総攻撃は九月二十四日と決定した。

かねてよりこの日あるを覚悟していた西郷、桐野、別府らは洞穴の前で別れの盃を交した後、岩崎谷の敵堡塁を目指して敵陣の中を突き進んだ。

やがて、二発の銃弾が、西郷の脇腹と太腿を貫いた。

彼は跪くと、鹿児島以来、絶えず彼の傍にいた別府晋介をかえりみて言った。

「もう、ここでよか」

「そうじごわんすか」

別府は西郷の背後に廻って、刀を抜くと、

「先生、ごめん」

と、村正の名刀を一閃した。

西郷の首が胸を離れると同時に、桐野、別府、辺見、村田と言った勇将達も、一斉に敵陣に向かって突き進んだ。

西南の役は、この日を以って終わるのだが、その翌年の五月十日には、大久保利通も不平士族・島田一郎らによって暗殺され、西郷の死後、僅か七ヶ月程にして、その後を追うかの様に、この世を去ることになる。維新の大業には共に薩藩の盟友として、その生死を共にせんことを誓いながら、最後は互いに志を違え干戈を交えて、その死処を異にしなればならなかったのである。

大久保の死後、意外なことが判明した。

島田らの唱えた「斬奸状」の中の「法令漫施、請託公行、恣に威福を張る」の一條とはうらはらに、借財こそあれ、私財はなかった。

ここにきて、初めてこの二人の政治家は共に私財を残さず、無私であると言う点で相通するものがあつたことになる。

さしも激しかった西南の役も終わり、その戦後処理も漸く終結をみた頃、言論界は特ダネとして、密偵団にあてた暗号電文をとり上げて、政府は西郷を暗殺しようとしていたと非難した。

その時、政府の要人の一人は、「決して、そのようなことはない。(ボウズヲシサツセヨ)のシサツは刺殺ではなく視察の意味で、西郷の行動を監視せよと言ふ意味であつたのを中原達が誤読したので」と、弁明に務めた。

明治の世も遠く去って、当時の政治家達の存在も既に伝説的となつた今日、果してその暗号電文が如何なる意図のもとに密偵団に発信されたか、その真相は知る由もないことである。(西南の役諸文献参照)



ちくら随想

山崎文学会
根岸元彦

「ちくら」という項を、念のため広辞苑で引いてみた。要約すると(バラ科の落葉喬木十数種の総称。東洋の植物であつて日本に最も種類が多い。ヤマザクラ・ソメイヨシノ・サトザクラ・ヒガンザクラなどが普通)と出ていた。この中、サトザクラというのがどんな桜なのか、私は明確には知らない。国語学の泰斗で私の恩師であつた山田孝雄博士の「ちくら」という本に、桜の種類は全部で百五十種ぐらいあるように書いてあつたと記憶している。

この本は戦前「ちくら書房」という出版社が、何かの記念出版として博士に依頼して書き下してもらつた特別豪華本で、余り高価なので図書館で走り読みただけだったが、お礼にというので書房から大学へ(御衣黄)という名の桜の名木が贈られ、講堂の脇に苗木が植えられた。今はどうなつてしまつたのかと思う。私はこの読み方も知らない。御衣(きよい)は高貴の身分のことだし、黄色は若年皇族の装束の袍の色だから、多分(きよいおう)だろうと思つて引いてみたが、流石の広辞苑にも載つていなかった。植物図鑑でも見ればあるのかも知れないが、残念ながら手許にはない。例の大坂造幣局の桜並木の中にこの木があるという記事を、たしか、新聞で読んだ覚えがある。まあこんなのから、ぼたん桜、八重桜、枝垂れ桜など、引つくるめて百五十種もあるのだろう。

私達、昭和九年に山崎小学校六年を卒業した三クラスで「昭九会」というクラス会を作り、時々会合して懐旧談に花を咲かせている。一昨年が卒業五十周年ということなので、何か記念になることをと相談した結果、現在の小学校の隅に桜の記念植樹をすることにした。丁度、仲間在花木の専門家さつき会の金井会長が居るので、丈夫で長持ちし、そのうえ銘木を：など勝手な注文をつけて彼に苗木選定を一任した。彼はどこからか、うすずみ桜」といふ銘木の苗を手に入れて

来て、それを皆で植樹した。この桜は、どこか中部地方にある樹齢千年の老木からの、実生の苗であるという。

桜を記念植樹に決めたというわけは、我々幼年時代の小学校、それはとりも直さず山崎城跡である訳だが、一番まぶたに焼きついているのは、矢張り桜花爛漫たる春の景色であった。その頃の校舎や運動場の周りにはほんとに桜の木が多かった。そんな懐旧の情が我々に桜の植樹を選ばせたものである。

私自身の記憶では、紙屋門の前、現在の小学校の玄関前あたりにあった老大樹で、丁度車廻しの中心みたいな具合に立っていた桜が印象に残っている。大体、各地の古城跡は桜の名所が多いようだ。山崎の近くでも、姫路城や津山城や竜野公園など。だが昔桜が多かった山崎城跡にはもうほとんど桜は残っていない。

山崎町で桜の名所といえ、昔は上ノ丁の荒神さん、つまり現在の元山崎の埴尾神社の参道の桜トンネルが一番だった。毎年四月上旬の日曜日に桜祭りが盛大に行われ、ボンボリを吊した夜桜見物や名物の桜餅の売店で賑わったものだった。今でも桜祭りの祭典だけは続いているが、肝心の桜が無くなってしまった。全く惜しい限りである。最上山も一時美しい頃があったが、今では衰えてしまつて杖を曳く人も無い。元城下村の比地が沖の泉

道土堤に見事な桜並木があったが、今ではもう無くなった。

現在、山崎で桜を探すとすれば、山崎幼稚園の裏、八幡神社裏参道の桜トンネルか、山崎高等学校南側土堤の桜ぐらいなものだろう。こんな自然豊かな山奥に居ながら、花見の場所も無いような情けない状態になってしまった現状である。

なぜこんなことになったのかと言へば、私を含めてのことだが、根源的には本当に花を愛でたり、花をいつくしんだりの情緒的精神文化が育っていないことによると思う。さつきの町の住民に向かつて失礼な言い方だが、さつきのように我が庭先に、我が持ち物として愛でいつくしむのは、何もさつきの町の住民だけの専売ではない。その証拠に、この夏の日照りに、町内あちこちのフラワーポットや路傍の植え込みのさつきが、随分枯れてゆくのを目にしたが、自分の持ち物でない限り、誰一人として水をかけてやろうとする人もない。水さえやっておけばさつきなんて枯れる木ではないのだ。枯らさないでおくだけなら、一番世話のない鑑賞植物である。真にさつきを愛する人々が住む町なら、こんなことがあつていいだろうか。さつきの町が泣こうというものだ。しかし、私も見て通つた一人だから、えらそうなことを言えたものではないのだが…。

話が横道にそれたが、桜に至つては全く誰の所有でもない。桜の中で一般的な染井吉野は相当肥料をやらなければ育たない。さつきに水さえやれないのだから、肥料など論外である。余程の好条件でなければ桜の名所は出来ようがない。特に吉野桜は何十本かの集団にならないと、一本や二本だけでは花の名所にはならないのである。ますます条件が困難になってくる。その上、吉野の寿命は四十年程と短い。見頃は十五年から三十年程の間である。もし桜の名所を保持しようとすれば、その間に次の世代の若木を育てて置かないと断絶してしまうことになる。その間絶えざる手入れと養育が必要である。特に桜は、毛虫や枝の病気がつきやすい。これの手入れも必要なのである。

時々、篠の丸公園や八幡神社の境内などへ、桜の苗木を植えるに來られることがある。しかしそれらはほとんどともに育つたためしがない。というのは、それらは大抵二年か三年生の吉野の若木で、まだ十分に枝も出していない親指程の一本棒である。小供達に取つては格好の鞭代りとなつて折られてしまう。また心無い人のいたずらでへし折られたりする。桜の若木が芯を折られたら致命的で、もうこれはまともに育つ見込みはない。桜を植えるなら少くとも七、八年経つて枝を



張つた太い若木で、簡単に手で折られぬいものでないと駄目である。その上、前述のように絶えざる手入れと養育が必要である。彼等も矢張り生き物なのだから。その昔、ワシントンのポトマック河畔に日本から送られた桜の苗木は、今は彼の地の桜の名所として、毎年全米から桜の女王を選んだりして、盛んな桜祭りを行っていると聞く。アメリカ市民が自分達の共有財産として、大切に守り育てている結果であるという。私が前述した花を愛する情緒的精神文化といったのはこのようなことなので、山崎の住民には根本的に言つてワシントン市民のような気があるだろうか。それが無くて我が事や目先のことばかり考えていたのでは駄目なので、山崎に花の名所が無く、あつても失われてしまつたというものは、以上のような理由だと思う。

染井吉野は幕末ごろ、江戸の染井という所の植木屋が新種を作って売り出したのが、花の派手さが受けて全国的に拡まったものと言われる。しかし、これは短命という宿命を背負っていた。

しかしこれに反して、山桜や彼岸桜の系統は寿命が長い。桜の古老木といえはほとんどがこの系統で、前記のうすずみ桜のように長命で巨木になる。吉野が出るまでは、桜といえば山桜が代表的だったようだ。私個人の好みから言えば、山桜が一番好きな桜だ。山の木立ちの間にちらほら見えるのは何とも風雅でいい。

花より先に若葉が芽吹き、ひっそりと上品な花が咲き出る。吉野のような華かきはないが、気品があつて一本の老木だけで十分鑑賞に耐え得る。普通、花木は庭木には植えないが、山桜なら隅に一本ぐらいあつてもいい気がする。しかし桜は晩秋から初冬にかけて、何時となしにパラパラと落葉がして始末に困り、その上、柿落葉のような風情がないので嫌がられる。所詮、桜は花だけのものなのだろう。昔から「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」と言われ、桜は枯れ枝でも切つてはならぬとされ、刃物を入れると木全体が傷むと言われている。だから他の庭木のように整枝することが出来ないから、普通の前栽では庭木にならない。私の知る庭園では、京都の桂離宮や修学院離宮の

回遊式庭園で、木立ちの中にある山桜を見たぐらいのものである。

平安王朝の昔から、花とさえ言えば桜を指したので、山といえば富士を指すのと同じであつた。

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらん

と詠まれれば桜の花に決まっています、決して梅や桃の花を指すものではない。

敷島の和心を人間はば
朝日に匂ふ山櫻花

有名な本居宣長の歌で、歌の出来は余りいいとは言えないが、桜を読んだものでは代表的な歌である。大昔から、富士に桜と言えば日本人の心の故郷であり、最も親しまれた花なのである。

しだれ桜も私の好きな桜の一つであつて、八幡神社の楠風閣の庭にも植え、大分育つて来て楽しみにしているが、手を入れることをしないで、余りいい格好に育つてはいない。百年先の成長した姿を夢見ている。京都の二條城の池の端に、柳のような美しい姿に仕立ててあるのを見て感心したことがあるが、私共ではそうはいかない。

山崎にも昔はいい枝垂れ桜があつた。山崎城の紙屋門に入って直ぐ左手に、一本の老木があつたはずだが今は見えない。

現在の西中学の玄関になっている旧西村邸の庭に、つい先頃まで見事な老木があつたのを覚えている。最上山の遊園地の崖端に一本あつたが、現在あるのかどうか久しく見ないので分らない。枝垂れも一本の木で鑑賞に耐える桜である。京の祇園円山公園のは今は二代目になっているが、前のは実に見事な枝垂れ桜だった。これなど全国的に有名な一本桜である。

文豪谷崎潤一郎は名作『細雪』の中で、京都の桜狩りを描写している。京には桜の名所は数々あつて、嵐山、御室の仁和寺、円山公園等挙げれば切りがないし、この春私が見た貴船の山桜など捨て難いと思うのだけれど、彼は京では誰の口にも上らない、平安神宮の御苑の枝垂れ桜を最高のものとして描いている。私もこの御苑には何度か入つたことはあるけれど、花の頃には出遭わなかつたせいか、細雪を読むまで桜があるとも気が付かず、花菖蒲で有名な御苑とばかり思つてた。いや又事実そうなので、谷崎が有名な花の名所をわざと避け、無名の平安神宮の御苑を選んだことや、殊更に花では桜、魚で一番美味しいのは鯛だとか強調するのは、彼が前期の悪魔主義から脱し、関西に移り住んで懐古的な古典趣味に変貌していった過程で、平凡な日本個有的ものに回帰したことを誇張しようとした、或る一つの手法であつた。

いやこれは、変な所へ迷いこんでしまった。これは「さくら随想」であつて、文学論ではなかつたはずだ。本筋に戻ろう。

富士とさくらといえば、以前、富士の裾野を廻つた時、背の低い、花の小さな可愛い桜を見たことがある。たしか「こごめ桜」と聞いたのだが本当かどうか。

何度か富士の裾野は観光したが、その日はとても澄み渡つた五月晴れで、雄大な富士の麗姿と可憐な桜の花の対照が、何とも言えず印象的だったので忘れられない。あの桜はどうも山桜の系統だったような気がするのだが、どんなものか。

桜で一番遅咲きがぼたん桜や八重桜の系統である。山崎では滅多に見かけない。私は厚咲きの花は何によらず余り好きでないのだが、この系統は矢張り一本立ちで目立ちたがる種類のような気がする。

京都では御室の仁和寺が有名だが、山崎で私が僅かに知っているのは山崎幼稚園の裏、八幡神社の裏参道への曲り角に一本と、そこから紅葉山への登り口の崖際に一本ある。厚物の遅咲きだから貧弱な木だけれど目立つのだろう。外にもあるようだったら御教示願いたい。

私はまだ行つたことがないのだが、大阪造幣局の通り抜け桜トンネルは、これは全国的に有名だから、テレビで毎年放映されるのでよく分る。ここは厚物が多

いのか大分時期が遅いようである。しかし聞くところによると、あらゆる種類の桜が集めてあるというが、それなら一番早い彼岸桜の系統から八重桜までは約一ヶ月近い期間があるはずだから、矢張り厚物中心になっているのだろう。今春行ってきた近所の奥さんによると、入口から出口までぎっしりと人の波で、人に押されて移動するようなことなので、桜見物どころではなかったとのことである。一度行ってみたいと思っていたが、それを聞いて全く行く気が無くなった。

どうしてこう日本人は群れたがるのか、あの花見の宴の乱痴気騒ぎ。「花より団子」というのがあるが、一飄をたづさえて雪見酒とか花見酒とかいうのは、もっと風雅な意味を持っていると思うのだが：

これはこれとはばかり花の吉野山と全く呆れ果てた眺めになってしまふ。その後は、これはこれとはばかりごみの吉野山」ということになるのだろう。

例年、花見頃になると恒例のようにテレビ画面に映る花見の宴。最初、申し訳のように花の梢を映しておいて、後は天下御免の無礼講、ドンチャン騒ぎ。桜の花はそっちのけの大酔態とは相成る。余りにも無邪気とも気楽とも言えは言える

日本の風土ではある。こんな風景を、桜の花はどんな気持で見下しているのかなど月並なことを考え始めたのも、年齢のせいかも知れない。(実年などと押しなべて特別に命名されるのは、淋しくも、又馬鹿らしいことである。人の寿命も桜のようにパッと咲いてパッと散るといった具合にいかないものか。

桜について思い浮かぶことはまだ沢山あるが、与えられた紙数も無くなったし、何だか老いの繰り言みたいになつてしまふ。そうなので、この辺で散り際としよう。



生沢朗画伯遺作展を省みて

遺作展実行委員長 和田秀男

との主旨を説明、理事会では反対意見はなく、開催が決定した。この遺作展に就ては壺阪会長が非常に意欲的であったことが、実現に拍車をかける結果となった。生沢画伯と私が竹馬の友であり、画伯が急逝するまで七十余年の交遊が続いていたという実情から、私が遺作展実行委員長に適任であると壺阪会長から理事会に諮られて決定し、計画・実行を一切委ねられる結果となった。

私は早速実行委員に、文連事務局局長川耕一、画塾経営の柳田勝、文連副会長藤井慧乗、示現会友福岡久蔵、現代美術家集団田中武の諸氏を選び、快諾を得て準備のスタートを切った。

早速実行委員会を開き協議の結果、先ず生沢画伯の作品を集める事に着手した。生沢画伯の絵は、山崎では画伯が山崎中学校落成を祝って同校へ寄贈した五十号の「市街風景」といふ大作の油彩画と山崎小学校の百周年記念に寄贈した「パリ街頭喫茶風景」を描いた水彩画があり、その他、竜野ロータリークラブ会長の本條衛氏所蔵の「堂島大橋」「ゴルフ」外

開催するまでに文化連盟では、六月十七日と九月二十四日の二回に亘り、理事会の議題の一つとしてこの遺作展開催を上程して、壺阪会長より郷土出身の著名文化人を称揚して郷土の文化性の高揚をはかる意味からも、昨秋急逝した生沢画伯の一周忌にはぜひ遺作展を実施したい

信用金庫所有の生沢画伯が欧州絵行脚の際描いたローマ、スイス、スペイン等の水彩画四点、私が直接画伯から頂いた若き日の油彩画二点等の外に、町内の知人が所蔵されている作品を実行委員がいち

いち訪問して所有者から借り集めた十数点及び本條衛氏の斡旋により、東京在住の本條勤・毅両氏よりわざわざお送り頂いた油彩画「スキー」「山」「バリ風景」又加古川在住の画伯の甥水川秀一郎氏所蔵の油彩二点等原画の合計三十六点並びに、本條衛氏所蔵の山と溪谷社発行の美術印刷の「山岳百景」の三十点、文化団体新潮会所有の森繁久也の「屋根の上のバイオリン弾き」の水彩リトグラフ三点、その他、新聞小説挿絵の石川達三の「自分の穴の中で」井上靖の「氷壁」有吉佐和子の「不信のとき」等をコピーして掲示したものと等、全部で百九十九点を集める事が出来た。



また生沢画伯の作品集で出版されたものは、文化勲章受賞者井上靖の小説挿絵「氷壁画集」があり、また井上靖と同行した旅の「ヒマラヤ&シルクロード」「生沢朗さし絵画集」「山岳百景」等があるが、そのさし絵集には、井上靖、石川達三、有吉佐和子、大岡昇平等の生沢画伯の画風・画業を讃えるエッセイが掲載されているのでそれをコピーして展示した。

会場の中には、生沢画伯が装幀した小説・エッセイ集なども展示した。永井路子の「水輪」「水上勉」の「湖の琴」井上靖の「憂愁平野」石川達三の「青春の蹉跌」外に源氏鶏太、森繁久也・石坂洋次郎等の著書の装幀等々。また別の卓上には、生沢画伯の書翰及び年賀状、行動美術出品画や帝展入選作の絵はがきの作品を集めて展示した。

また「想い出のアルバム」として、パネルに生沢画伯の少年・青年時代から亡くなられるまでのさまざまな写真を掲出、一人息子の世界的レーサー徹君との親子懇談姿、新婚記念、文芸春秋の文士劇出演、井上靖との上高地登山スタイル、モスコ外遊等の写真集には多くの鑑賞者が足を留めて見入っている姿も見られた。この遺作展の美術展らしい雰囲気醸し出すために心を砕いた。

幸いにも実行委員の一人にシャトルで

開かれた日米絵画展に市長賞を獲得したり、イタリヤ美術展に入賞した柳田勝君が居るので、会場の設営にはその柳田君がいろいろ立案・工夫して、私どもの心に描いていた夢を実現させた理想的な会場を、見事に演出してくれた。

また、会場造りには、文化連盟の理事の方々にはパネルの運搬等いろいろな重労働的な労務を心よく担当して頂いた。私どもが一番心を痛めたのは、これだけの絵を集め、会場設備が完了しても、果たして幾人が鑑賞して下さるかと言う危惧で、心の底にそれが重く沈んでいた。然し、それは我々の杞憂であった。六日の朝刊の神戸・読売の両新聞には詳しく写真入りで報道され、蓋を開けて見ると鑑賞者は次々と後を断たず、芳名簿は初日一日で二〇〇名を超す記載者があり、翌日は初日鑑賞者の推奨があつたのか、

その家族の方々如初日にも増して来場され、三日目は一般人の外、中学生の一行の多数の鑑賞者を迎えることが出来、三ヶ日を通じて一、〇〇〇名近い入場者数を数える事が出来た。

我々文化連盟としては、精神的にも物質的にも大行事であつたが、来場の誰彼となく賛辞を頂き、大成功裡に閉幕する事が出来て、心に銘じる深い欣びと感動を覚えた。この催しが地域の人々の美術鑑賞に新しい目を開かせ、地域の文化性



をいささかでも高める有意義な行事であつたと心ひそかに満足感を覚えている次第である。

最後にこの遺作展を発起下さった壺阪会長さん始め事務局や副会長・理事の方々が、実行委員の方々に心から感謝申し上げます。

またご協賛を頂いた経営者協会五十一社の方々にも衷心より厚く厚くお礼申し上げます。

一年の回顧

歌話会の詠草から

山崎歌話会 松本寿賀子

歌壇での流派を超え、歌を作り歌を語

ろうと始めてより、五十三年の歴史をも

つ山崎歌話会。毎月の第一日曜日の午後

が、誰も待ち遠しい。全会員の喜びは、

何と言っても、藤村省三先生の御指導を

頂けることにある。時には厳しき歌評を、

また、微に入り細に巨る文法・用字の解

明等々。氏の博学と多識を惜しみなく傾

けての一語一語に時を忘れ、ふと気がつ

けば窓に短日の暮れかかることもあった。

この様に、より研鑽をつづけつつ、各自

が作歌の水準を高めることが出来たこと

を、一年の喜びとしたい。

尚、九十三歳の大井秀子さんが無欠詠

にて、会員への無言の励ましとなったこ

とも特筆したい。

○稲村幸子

「幸」を過去形に書き遺しつづつ妻子恋ひ

しか墜つる機上しあわせに

辛うじて鹵型に人を見分くとふ墜死の惨

は想ひみがたし

○新田弘美

すずらん台と言ふ名もやさし朝あさを吾

子が勤に降り立つ駅ぞ

肥料撒きて疼きやまさる右腕を夜の畳に

投げ出して寝る

○大井秀子

風が煙をあふり煙が人を追ふ追はれつつ

焚火の傍かたへはなれず

冬の雨あがりて畑のやはらげば大根めき

て尻餅をつく

過ぎ去りし九十余年の歲月のあはあはと

して咲く胡蝶しやが花のはな

○太田たき子

「麦死なず」の作者を語る放送に夫との

遠き幸が閃く

クロッカスの黄の花がらを集めをり花が

らよりも皺みたる掌に

○大前静枝

信仰を持たざる子との接点を求むれど尚

齟齬そごのあるのみ

鮮やかな斑点持てる川魚は山女やまめか吾子が

くりや辺に置く

○栗山節子

十字路の夜の信号みな赤き瞬時を犬の染

まりて渡る

生徒らの習字に筆を入れし嫁ほのかに朱

液の匂ひを纏ふ

○山崎きよ子

笹落葉しき降る昼を山嵐にとびたちやす

き種子こぼしゆく

庭すみに翹たたむごとぼうたんの白き花

びら重なりて落つ

○松本富治

決算の記帳のペンを又おきてくもるとも

なき眼鏡を拭ふ

絹雲の散りばふ空も海を抱く鳥影も澄み

て秋の気動く 日生にて

○藤原すみ

ほろ苦く老醜の意識かみしめてお日待の

席に口重くある

若き女性みちびきてバス降りゆく盲導犬

の背の広しも

○藤村ふくよ

管制塔の指示によるとふ旋回に旅のをは

りの心がゆるる

朝かげを白く弾きて木蓮の八分咲きなる

一樹かがやく

○藤村省三

木に残る枯葉のごとく吊されて鱗は淡き

日に乾きゆく

忘れたきことのしきりに浮かび来てこの

夜ちかし梟のこゑ

○赤松年重

しづかなる思ひにあらず、三度目の盆会

夫に迎火を焚く

漸くに悲しみ忘れ引くことの多くなりた

り形見の辞書は

○青柳 良

河ぶちの菜の花群に頭のみ見せて魚釣る

男の子ふたり

息と嫁の留守を守りて事もなく明けし朝

光玻璃戸にすがし

○安東はつ子

投げられて身を焼尽の恵比寿さんとんど

の灰の中に笑みをり

夕暮れの無人市場に寄りて買ふ棚に萎び

て残る間引菜

○北 隆治

台風のごとき幼が今日は来る妻よ壊るる

物かたづけよ

ふる里に心は和む老母と何を語ると言ふ

にあらねど

○北川智恵

父の仇討たむ覚悟の眉揚げて五郎時致あ

でやかに舞ふ

熊蜂がとまりてひとひら散らしたる鉄線

は花のバランスを崩す

○菊原たか子

病棟のみなごばたれて土塊の山となりし

に霜白くおく

伝染病棟阻止にきほひし日は遠く毀され

て土の黒くひろぐる

○森本萬千子
川原に焼く芥よりたつ煙ひろごるなかを
鴉むれとぶ
剪り落しし女の髪の艶めくをさりげなく
踏み美容師うごく

○松本寿賀子

両の掌に掬ひあげたる白魚のあはれかす
かに透けるはららご
滾る湯に沈めし蟹はたちまちに朱となり
太き爪先ひらく

各地短歌祭入賞入選歌

◆五十九年度西播磨県民短歌祭

(昭和60年2月23日 新宮町)

兵庫県知事賞

荒れし手を滑る樹液に濡らしつつ夫の
伐りたる杉の皮剥ぐ 田中よしの

西播磨県民局長賞

如何なる未来掴むか小さき手のひらを
僅かにひらき眠る幼な子 森本萬千子

西播磨文化会館長賞

詩きてゆく種麦厚し薄しといふ後より
肥料撒きくる妻が 大谷 吉次

西播磨文化団体連絡協議会長賞

鳴る時も鳴らぬ時もある口笛に犬は戻
り来草の実つけて 山田百合枝

新宮町文化協会会長賞

急ハンドル切りて避けたる猫の目があ

やしく光るわが眼裏に 在賀 彦一
やさしき父となりて家には帰るべし吾
を責めぬる税務署員も 新田 弘美

◆兵庫春季短歌大会

(昭和60年4月29日 神戸市)

兵庫県文化協会賞第一席

家柄も肩書もなく暮しきて子の釣書を
短かくしるす 安東はつ子

兵庫県歌人クラブ賞第二席

憤り封じこめむと締めてゆく塩瀬の帯
のきりきりと鳴る 新田 弘美

兵庫県歌人クラブ賞第五席

乱雑な孫らの靴を揃へおきて若者は預
金の勧誘はじむ 田中 君枝

入選

背負ひくるる孫は十八戦死せし夫に似
てさやけく黒髪匂ふ 北川 智恵

雪積る山に向ひて客のなき店守るわれ
の一日始まる 小倉 法子

◆第四回宍粟郡民短歌祭

(昭和60年8月25日 安富町)

県議会賞

山峡に積まれし廃車風葬を思はせて風
に光る窓あり 森本萬千子

県会議員賞

時長く待合室に待つ患者話しつかれて
皆黙しをり 太田 貞子

安富町長賞

緑濃き本草の上に垂れしまま夏は動か
ぬりフトが光る 富和かず子

神戸新聞社賞
栗の葉を喰ひつくしたる青虫が葉より
も青く太りて下がる 栗山 節子

安富町議会議長賞

長雨にゆるびし庭を屠所へゆく牛は足
跡深く残せり 伊東まさ子

安富町農業協同組合賞

迎へたる嫁を家族と知らぬ犬旬日すぎ
てなほ吠えつづく 安東はつ子

宍粟郡歌人連盟賞

形見なる夫の地下足袋履きてゆく道に
幾度もつまづきながら 日下ふさゑ

移転歴十八回目の山里にかく住み古り
てふるさと遠き 田中 君枝

ことさらに話題にのぼす孫子なく聞き
ゐるのみにクラス会終る 名賀ときわ

◆六十年西播磨県民短歌祭

(昭和60年11月7日 新宮町)

兵庫県知事賞

棚経の僧への布施を佛前に預けて朝よ
り畑に出て来ぬ 赤松 年重

西播磨文化団体連絡協議会長賞

道の辺に筵を敷きて水番の夜の田に水
の行きわたる待つ 北 隆治

新宮町長賞

早魘の田に汲みあぐるポンプ音夜の鼓
動の如くにひびく 安政 嘉子

新宮町文化協会会長賞

お早うと言葉かけくる車椅子の少女は
明るき顔をあげたり 太田 貞子

人の居ぬ無人市場に人の目を意識しな
がら並ぶ品選る 安東はつ子
リュウマチに歪みし両の手の指を隠す
仕草のいつか身につく 瀧元 喜子

◆兵庫県民短歌祭

(昭和60年11月23日 小野市)

兵庫県文化協会賞第二席

点滴の瓶とり替ふる看護婦が夜半の欠
伸を噛み殺したり 田中 君枝

入選

縫上げて孫のくれたる眼鏡入れやや大
きければペンも入れおく 大谷よしゑ

円居より退くしほどきも心得てひとり
の部屋の灯を点す 稲村 幸子

ポリープを嘆きて話しぬし客を最後に
今日の店早く閉づ 小倉 法子

十字路の夜の信号みな赤き瞬時を犬の
染まりて渡る 栗山 節子

◆短歌会し案内◆

▼新樹短歌会

藤村省三が指導する初心者から中習者までを
対象としたグループ。新人の入会を歓迎しま
す。例会は毎月第三日曜日の午後。

○事務局 山崎町須賀沢六八 山本千代方

▼山崎歌話会

昭和七年より継続五十余年。結社の領域を越
えた研修と懇談の場。入会自由。例会は毎月
第一日曜日の午後。

○事務局 山崎町山崎一九 松本富治方

▼かしわの短歌会

老人大学かしわの学園の短歌部。六十歳以上
の方を対象に、稲村幸子が指導します。
○事務局 老人大学かしわの学園内。

句集「一人にて候」賛語

山崎町俳句協会

和田疎人

小紫いくさんが、処女句集「一人にて候」を本年九月に出版された。

昭和五十年以来の句三、〇〇〇余句の中から六〇〇句を選び、一頁に二句という厩大豪華な三〇四頁の句集である。

私の序文にもある通り、五十年五月に当地の老人大学かしの学園の俳句部の「山脈句会」に入部され、昨年四月に「老人大学」は「生涯教育大学」かしの学園と改称され「俳句部」もそのまま引継がれたが、いくさんは月二回の例会には必ず出席されるという熱心な作家である。その間「俳句公論」の小寺正三、「貝の会」の沢井我來両師に私淑、師事され、その豊かな叙情性と文学的素質を認められ、その精進の結晶ともいふべき句集を上梓されたのである。

私は彼女が明治四十四年生まれという年配で、なお叙情性豊かなロマンと憂愁

の情趣と独創的な素材に心惹かれて推称を惜しまないものである。

句集中より私の愛誦する句を抽出して祝福の饌としたい。

野苺に馳せし記憶の野よ山よ

桜貝旅の記憶の砂こぼす

石積めば石も仏よ残花散る

解く帯の渦やわらかに春灯下

潮騒は鳴咽の如し桜貝

信濃路の車窓に散るよ花杏

大胆な恋の詩あり芥子真赤

登り窯中は火の修羅夜の秋

病める日々銀河の果に眠りたし

秋深き天より貫う柚子一つ

蝦夷に生れ播磨に老いて雁仰ぐ

冬の蠅己が影ふみ影を追う

冬の蝶ふれば命絶ゆるやも

雪の里星より早く灯りけり

西播磨文化会館創立10周年記念西播磨県民俳句祭

入賞句

新宮町の西播磨文化会館創立十周年記念俳句祭は、五十嵐播水、堀内薫、桑田青虎、浅井青陽子の四師に選を頂き、投句数四百三十三句の中から、十一月二日の俳句祭に於て、

兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県文化協会会長賞、西播磨県民局長賞、西播磨文化会館会長賞、西播磨文化団体連絡協議会長賞、新宮町長賞、新宮文化協会長賞を選出し、

相生市二名、赤穂市二名、姫路市一名、龍野市一名、山崎町一名、新宮町一名、千種町一名、上郡町一名が入賞。

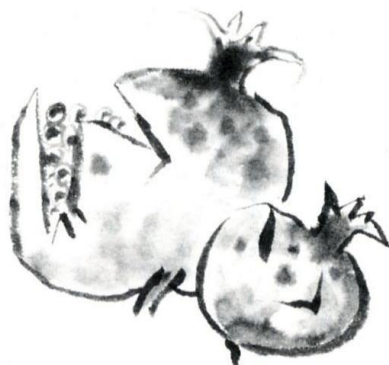
▽山崎町入賞者

高野志都代（山崎俳句協会所属）
露一粒一粒毎に噉の在す

また、五十嵐播水師に佳作として入選句

山中 恒女

望近し今宵も出でて空仰ぐ



山崎

山崎町俳句協会の一年の歩み

福田泊水

1月15日 山崎町俳句協会「青嶺部会」新年句会、終了後「新年懇談会」 出町公民館にて

1月16日 山崎俳句協会「山脈部会」新年句会、終了後「新年懇親会」 生甲斐センターにて

1月22日 老人大学講師及代表者・生徒

会役員の合同協議会（和田出席）

2月2日 西播磨県民俳句祭、実行委員会、新宮の県立文化会館（和田出席）

2月24日 西播磨県民俳句祭、午後一時より、西播磨文化会館にて五十嵐椿水先生、指導・選句

3月24日 山崎俳句協会「青嶺部会」吟行会、岩見梅林・新舞子方面吟行、新舞子荘にて披露

4月4日 老人大学が生涯教育大学かしの学園に改称され、今後のクラブ担当につき協議

5月12日 俳句&ハイキングの会、山崎町教育委員会主催、一〇〇余名参加

俳句協会より和田外四名出席指導・参加。全員の句を書家本条邦子氏が短冊に揮毫し、町役場の玄関ホールに展示した。（入選句は6月号町報に発表）

9月22日 小紫いく氏句集「一人にて候」出版記念祝賀会を南光町文化会館にて挙行。山脈句会より和田外十五名出席

9月25日 伊丹市柿衛文庫館へ「山脈部会」が吟行。芭蕉・蕪村等江戸時代の俳人の書軸、短冊、色紙等肉筆を鑑賞。伊丹会館にて作句を披露

10月12日 西播磨県民俳句祭記念大会、最終打合せ会、和田実行委員出席

10月22日 和田協会代表、千種ささらき句会の招きにより出席、選評

11月2日 西播磨県民俳句祭、西播磨県民俳句祭が開催され、選者として五十嵐播水師が指導出席「青嶺」「山脈」の有志出席。（詳細は十周年記念大会欄に詳報）

この外「青嶺部会」は一ヶ月一回、「山脈部会」は一ヶ月二回（但し七、八月は一回）例会を開き、作品集を発行している。

また本年度は、五十六年以来、「山崎俳句大会」（宍粟郡在住者対象）西播磨県民俳句祭が時期を同じくしたので、来る六十一年度三、四月頃に延期する事に決定したので、ご了承の程お願いしたい。

山崎町俳句協会雑詠

「青嶺集」

尺蠖虫己が歩中の尺立てて 芦田八重

古曆捨つるに惜しき名画あり 淡路澄女

風の意にやさしく添うて秋桜 猪尾清子

夏瘦のもの問ひかける大きな眼石野光栄

無口なる姉が生活の針祭る 伊藤紫霞

サンガラスはずせば見目のよき少女大谷延子

魚ずしのどかりと出され在祭 高野南嶺

干潟にて遊ぶ鹿あり春近し 高野薫風

娘に配る心ずもりの菜も漬けて沢田ちえ子

冬蝶の屍となるも色持ちて 下村君子

きらめきが沖までつづく春の海神名沙羅

部屋隅に亡父愛用の置炬燵 菅原郁代

宿題を広く散らして炬燵板 田中良子

枝の泡より落ちつきて蝌蚪泳ぐ田中 恵

露けしや行年若き兵の墓 中野秋藻

大家族のごと連なりて蝌蚪泳ぐ永井とみ代

甘茶仏み胸ゆたかに濡れ給ひ 原田魚梯

たけくらべ灯影に読み針供養原田小次郎

一桶が緋色に燃えて金魚売り 原田駆雲

密月の旅の賀状やパリより 秦 千里

手袋の編目くつきり雪礫 福田泊水

祖母在りし頃よりつづく茎の石藤家千代

神樹鳴らし風吹きぬける留守の宮 深川春雄

茎桶に井戸水張れば湯気ほのか前野千恵子

野仏の影のとどきて蝌蚪の水 村元優子

蟹鍋に暖をとる間も雪積る 山中恒女

秋雨や起重機重く向変える 山田東軒

癒ゆるとはただ慰めや萩の雨 山田磯女

木地師てふ墓累々と露けしや 和田疎人

「山脈集」

悲語伝う一族塚の草紅葉 秋久光子

柚子の香の手にほのかなり厨妻伊藤紫霞

旅慣れぬ娘の旅支度明け易し 梅田梅風

ほろ酔ひにひとさし舞へり年忘榎本ます糸

アパートの一灯一扉秋深し 高野しづ

うるみたる月に植田の広々と 尾崎すゞ子

扁額の「大悲」の文字に西日濃し小柴い

砂浜を足跡しるく行く日傘 小畑柏人

鹿おどし鳴る水園の五月闇 高野薫風

串鮎の背に一筋の朱を引きて 杉本いし

宵宮の賑い離れ螢売り 田中 恵

こほろぎもがやくも居る土蔵住居 谷林はつゑ

生かさされて今日も畑打つ小の日 牲川信子

白芙蓉径を狭めて登り窠 野村静山

順拜に集印重ね秋深し 本條栄女

浴衣裁つ藍をこぼして青畳 宗平素栄

人住まぬ庭石路高く黄を掲げ 山野源子

海嘯の如く凧鳴り止まず 安井方円

蒼空の陽を吸い袖子は金色に 横井雪子

戻りしより冬蝶のみじろがず 和田疎人

さ	つ	き	づ	く	り	に	つ	い	て
播磨さつき会 井口隆吉									

私は、さつき愛好者の一人です。私はものを作ることは好きですが、書くことは苦手ですので、どうなることやら解りませんが、お許し願います。

私がさつきを作り始めたのは、三十年ほど前になります。美しい花を見て作ってみたいと思ひ数品種購入、そして又一つ又一つと変わった品種を買い集め、初心がたどる道を歩んできました。そして十四、五年後には鉢数が多くなり、少し売りたいと思ひ花木組合に入会。当時は花さえ咲いていれば、いくらでも売れました。今思えば、愛好者で通せばよいものを、売り屋（半商人的）になりさつき作りの研究を怠り金儲けに走りすぎたのが間違いであったのではないだら

うか？ さつき作りの先進地・山崎町から、唯の、さつきのある町に変わってしまった。現在では後進地の方がよく研究し、月一回は研究会を開くなどしており、しかも若い人が半数をしめております。山崎町は先進地なら先進地らしく、もっともつと研究をしなければ、他地区に遅れてしまうのではないか。

さつき祭は、祭りであるから、花だけのさつきでいいかもしれない。しかし「通の目」を忘れてはいけない。又展示品も数だけではなく、良い作品、目を引く作品を見てもらうように、一人ひとりが、努力をしなければいけないと思います。

町当局にあまり甘えずに、さつきを作る私達が、もっともつと努力し研鑽を重ねなければ、さつき祭に多くの人が来てくれないと思います。

よく客の入るレストランの料理人は、自分の為より、お客のために造ると言う。自分自身もその料理づくりを楽しむ心が必要だ。味つけに凝り、自分のテクニクを総動員して、自分の楽しみをうまく客にアピールし、客が舌鼓を打つてくれる料理でなくてはなりません。

私達の今後の取りくみとして、新品種を入れるとか、山崎町独得のものを造型するとか、良い品を安く、流行におくれぬ品を作るよう努力しようではありませんか。



揖保川水系の沃地に育かれた山崎町には四百年に亘る文化の足跡があり、これを知り是を伝えるのが、我々郷土研究会の使命であります。大正末期より昭和の始めに山崎史談会なるものがあり、安井俊二氏が世話をしておられ、古老にはかつての福原塾の塾生だった人が多く、少数の会で有りましたが、色々と昔話に華を咲かせたようであります。

それが昭和八年に郷土史研究会となり会員も増え、発会式を挙げて機関紙「ししさわ」を発刊されたのであります。

事務局は安井俊二氏や安田青風先生等で、何れも歌人であり歴史研究家で文化人の集りであったようです。しかしこの「ししさわ」も戦時中、紙不足の為休刊となり、戦後二十三年に又復刊され、山崎高女の教諭であった島田清先生の肝煎で暫く続けられました。先生の転勤と共に又沙汰やみとなり、戦後の混乱期でもあり人々は生活に追われて、文化不毛の時期とでも申しましようか、会員もい

るのかわからないのかからぬ様な有様でありました。然し乍ら、昭和三十年も過ぎると世の中も次第に落着きを見せ、経済成長と共に文化も又発展の時期に至り、昭和三十三年、郷土研究会なるものが再発足されました。会員もかなり増え、私も初めて正会員に加えて頂きました。

会報は始め年三回発行され、会名も郷土史の史を抜いて郷土研究会とされました。郷土の歴史ばかりを研究する会だけでなく、未来の郷土発展を考える研究会でも有りたいたいと言う名目で、始めは先進地の施設等を見学する旅行も致しました。しかし、今は老人が多く、年二回の旅行も、名所・旧跡を巡る慰安的なものも多く、人々から単なる旅行会の様に言われ何等事業らしいものもなく過ぎました。四十年代に至り、郷土館の建設、山崎町史の編輯などを計画し、五十二年には町史の編纂も完成致しました。又部活動を続け、史跡に石柱も建てました。

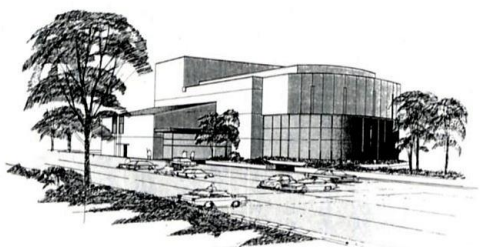
その中、山崎町にも多くの文化団体が寄り、文化連盟が結成され、郷土研究会もその団体の一つに加えられました。それは、会員の多くの人が色々の団体に兼て加入されていて、山崎文化の発展に寄与されているからで、一層力強い文化団体になったのであります。

山崎町の皆様、山崎郷土研究会は六百

人を超す団体であります。決して老人会でも旅行会だけでもありません。もっと多くの若人達に入会して頂き、年齢的にも若返らせたく思います。その為には青年部を造っても良いと思っています。そして活発な文化活動をして、山崎町文化の発展に寄与できればと願っています。

文化会館構想着々すすむ

文化会館（正式な館名は未決定）の建設計画は、六粟郡広域行政事業として、昭和六十一年、六十二年間に亘り建設されるもようです。



事務局

最近テレビをみて感動したこと

昭和会 本條 衛

大事件が頻発する。

テレビは、これらを瞬時にして茶の間に伝達する。

最近、放映された事象の内、深い感動を覚えたシーンを辿ってみよう。

日航機遭難の場合は、各々の部署で、男女乗務員達が、最後まで自己の責務を忠実に遂行した事についてである。ヴォイスレコーダーに記録された機長の肉声は、事故原因不明の俣、安全運航を図らんとする彼の必死の努力を、生々しく伝えた。

メキシコ大地震の際は、欧州各国の素早い対応と、そのレスキュー隊の活躍に感銘をうけた。瓦礫の下、人の入れない所に救助犬が入って行って、負傷した人間の匂いを嗅ぎつけ、救助隊に知らせる。日本にはいない救助犬の現況や、我が国の今後の対外救助援助のあり方について、テレビは教え、示唆する。

コロンビアの火山大噴火の情景。テレビに映る惨状は、正に二十世紀のポンペイそのものであった。救助のヘリコプターに一人の少年は叫んだ。「僕はまだ大丈夫です。」救助の順番を譲った為に、彼は泥流に沈んで逝った。

あのテレビをみた全世界の人々には、三年前の冬、ワシントンの旅客機事故に於ける一人の中年男の姿が二重写しになって、臉に浮かんだに違いない。彼も一婦人に救援の順をゆずって、降りしきる雪のポートマック川に、我が身を溺死させてしまったのであった。

瞬間の映像から、我々は、人間の崇高さを、厳肅に学ぶのである。

さて、ジュネーブを舞台とする米ソ首脳会談は、小異を捨てて大同にいた姿を両巨頭が演じて、周囲を安堵させた。

レーガン大統領が帰国後、米国議会でうけた喝采は、各地に感動の渦をまきおこし、テレビによって自由主義世界にこだましたのであった。それにもまして、十二月六日、NHKニュースセンター九時の報じた光景は特筆すべきであろう。

米ソの高校生達が宇宙中継を通じて平和希求の歌曲を、交互に高らかに合唱いあげるのである。そしてテレビ画面は、彼らの対話の積み重ねにより、真実の日常生活を浮きぼりにし、両国青少年の反戦の決意を明らかにさせたのであった。来年は相当数の若者が、両大国を相互訪問するという。テレビは事実を活写する“



人間の肉体も精神も、その根幹は青年期に育成され、生涯を通じて大きく変わることがないように、いずれの国家も、その本質は古代の歴史のなかで形成される。日本文化の源流を見つめようとするとき、そこから偉人の旅が始まる。

日本仏教の開祖ともいうべき、聖徳太子に光を当てる。太子の遣唐使、遣唐使の派遣はたいへん危険であり、多くの人命を落としたが、それにもかかわらず、国内の秀才を留学させたのは、海の彼方にある先進国の文化を移入しようとする熱意の現れであった。

しかし今日、日本において、鑑真や空海を日中友好に貢献した僧としてたたえるが、太子を日中文化交流の恩人として評価しない。

太子の事績については、近代歴史学の始発点といわれる久米邦武以来、懷疑が強い。そして津田左右吉は太子の文化的事績のほとんどを否定した。日本の仏教は悟りを頓悟と切り離す道

を選ばなかった。最澄は、おそらく太子の影響によつたのであろう。一乗大乘戒をもうけ、小乗の戒を斥け、心が清浄であるということを最大の戒とした。

ここで日本の仏教はインドや中国の仏教と大きく変わった。日本の仏教は戒律を棄てたという見解は、そこから生じる。日本仏教はけつして煩惱を離れた悟りの道を求めず、むしろ煩惱のなかにいて悟りを見つめる道を見いだそうとした。

空海は即身成仏を説き、誰れも生まれながら仏心ありと説いた。また法然は人間は深いけがれの中にあるので南無阿弥陀仏と念仏を唱えることによって救われると説き、ついに親鸞にいたって、肉食妻帯しつつ、なお念仏を唱えれば極楽浄土に生まれることができるとした。

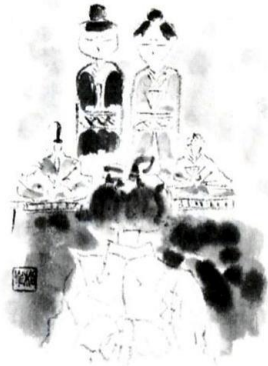
それらはすべて、太子の作とされる、三経義疏という経典の註釈書のなかの、勝鬘経義疏の如来藏思想を信じる道からで、今日なおひかり輝いている。



文化会議に出席して

山崎郷土芸能保存会

塚本 重郎兵衛



85西播磨の文化を考えるシンポジウムの議題で会議が始まり、先ず神戸大学名誉教授米花稔先生の「地域からの新しい展開」と題した基調講演を聞き、そのあと四分科に別れてそれぞれの専門的な諸先生と共に分科会を開き、私は会の「市民生活と文化のかかわり」と言うテーマの第四分科会に参加して勉強しました。先ず感じた事は、それぞれの生活の中に文化がある事、産業・化学技術・電

能について

山崎謡曲 森下 琢郎
同好会

我が国の誇る古典芸能の一つである能楽は、文楽、浄瑠璃、歌舞伎、義太夫といったものより早く、約六〇〇年前、室町時代に観阿弥、世阿弥によって大成された舞台芸術ですが、結崎・外山、円満井、坂戸の大和四座が規模が大きく、そのうち結崎が観世流の祖であり外山は宝生流、円満井は金春流、坂戸は金剛流の祖であるとされています。(喜多流は元和四年徳川秀忠の時一流創設) 又これ等は相互に姻戚関係を結んで一座の維持に努めております。そして世阿弥の別紙口伝に

ある様に「たとえ一子たりというとも、不器量の者には伝うべからず。家、家にあらず続くをもて家とす。人、人にあらず知るをもて人とす。」この精神が連綿と続いて今日の隆盛を来したものと思われます。考えさせられる言葉だと思えます。室町時代に偉大な天才の出現、即ち作者であり作曲家であり、演技者であり更に演出家であつて大衆への接近、更に芸術性の向上を求めた観阿弥。それを更に高邁な境地に能のあるべき姿を示したのが世阿弥であつた。これが足利義満という

気技術、歴史は言うまでもなく、あらゆる分野の中に文化がある事を知りました。特に身近で解り易く感じた事は、川を考えてみると言う事を聞き、自然の川の中の文化、川の向こうに渡るとしても舟で渡つたり、浅い所は歩いて渡つて居りましたが今は完全な永久橋が各所にあります。その間においても木橋のため増水すればすぐ流されてしまつておりました。農業に必要な用水にしても人工井堰であつたため増水のたびに流れたが、現在は動力による水門井堰となり、又川の流れを利用し木材薪炭を運搬し、川の要所所には町が出来発展しております。こうした自然の多様性に依る文化の現

大パトロンの庇護をうけて格調高いものとして完成されたと申せましょう。

能は歌舞、伴奏、声楽の三要素を中心としての歌劇であるが、純粹演劇との根本的な相異点は、筋や物真似自体から直接発散される面白さをねらつたものではなく、世阿弥はそれ等を演ずることにより生ずる美的感覚をねらつたものであります。所謂、幽玄美といつておりますが、早わかりする強烈な刺戟や、めまぐるしい変化を求めるとはなく、奥深い象徴性無限のものを求める東洋的幽玄美と言えます。能の台本である謡曲は、所謂「謡う文

れを見逃してはならない。又端先生は物を見た時、感動感情がなくては文化を考える事が出来ないと言つておられました。若い働き盛りの者が文化に対して如何にすれば理解し取組むきっかけを作る事が大切な一つの大きな課題ではないかと思ひました。

最後に、文化活動に依り、人と人との交流は高い教養や知識を得て、洗練されたるおいのある生活をうる事が出来るのではないのでしょうか。

なお付け加えたい事は、当町ももっと文化行政に取組んでいただきたいと思ひます。文化なくして、町行政は進歩しないのではないのでしょうか。

学」として独得のものであり、その多くが説話、物語、詩歌といった先行文学に素材を求めています。能又は謡曲に於て最も大切なものは位ウチです。役の位と曲の位とがあることを十分心得るべきことであります。学生時代より、当時はよくわかりもしないくせに流派を問わず能楽堂に足をはこんだが、梅若万三郎(先代)観世華雪(鉄之丞)藤波順三郎、橋岡久太郎、宝生流では宝生九郎(重美)野口兼資、ワキ方では宝生新、松本謙三。太鼓の川崎九洲(利吉)小鼓の幸祥光(悟朗)等の名前や舞台姿を懐しく思い出します。

古典舞踊

現代の日本には、数多くの踊りが生まれ育っています。古くは神代の時代天照大神の岩戸隠れにアメノウズメノミコトが踊ったといわれる原始舞踊（神楽巫女舞）、平安時代から室町時代にかけて生まれた能楽（白拍子舞、田楽、猿楽）等、然しこれらは、宮廷舞踊であったり武家専有のものであったりして一般庶民はみる事の出来ないものでした。これらを背景に庶民向きに生まれたのが、出雲の阿国が演じたといわれる歌舞伎で、これが歌舞伎舞踊の始まりといわれています。

今一般に古典舞踊（日本舞踊、邦舞）と呼ばれているものは、いわゆるこの阿国が始めた歌舞伎踊りと、それを母体にして生まれた現代日本舞踊だけを古典舞踊といい、阿国以前のもの、又その流れをくんでいないものは、いくら日本で生まれ大流行していても別名がつけられ、古典舞踊とは呼ばれていません。

さて、古典舞踊と一口に申しましても、長い間培われ、育まれる間の年代の移り変わりや、踊る人の持味等により多種多様ですが、いずれも舞の形態踊りの形態振りの部分の三つから成り立ち、演技的に舞いと踊りがはつきり区別され、舞と

山崎邦楽邦舞研究会 郁踊会 坂東 寿江予志

舞のつなぎ、踊りと踊りのつなぎに振りが入っています。

更に舞踊の土台は音楽で、その大切な音楽の基盤は何といっても長唄でしょう。そして常磐津、清元、義太夫、一中節、荻江節等ありますが、舞踊はこれら唄のもつ内容（作者の心情）音楽のかもしれない、十分自分の心でつかみ、拍子に合わせ、心のままに、ゆったりと、快よさを感じさせる様な所作で表現するという事だと思えます。世阿弥の、「心より心に伝うる花、それが芸」という言葉がありますが、何とかその心に少しでも近づきたいとおもっています。目に映り瞬間的に消える芸、終わりのない道だけに非常にこわさを感じます。古典は古典として努力し暖めながら、昨今のテンポのはげしい時代に、どの様な方法で興味を与え、理解してもらえるか、今後に残された問題だとおもいます。



祐助氏を偲ぶ

山崎美術協会

福岡久蔵

私は山崎美術協会とお付き合いをさせて頂いて、もうかれこれ三十年になります。私はずっと絵画部門に所属していたわけですが、当初の絵画部門は低調で、伊藤親保先生に「郷土の文化を高めるのには学校の先生が先頭に立たなければ郷土の文化は育たない。」とか「先生が先にたつてやらないと絵画人口も増えない。」などと、よくハツバを掛けられたものです。

その当時の美術協会展といえは書道が中心で、学校の先生方の出品が多かったように思います。そして、書道部門だけで作品が百点を超えるという盛況ぶりでした。

その後、友沢庄二先生が陶芸、中でも茶碗づくりに寝食を忘れて取り組まれました。また、武野金霞先生が漆芸の教室を開かれました。それぞれ自分の作品の質的な高まりを求めただけでなく、後継者づくりにも力を入れました。その甲斐あって、工芸部門は書道に続いて隆

盛を見たわけですが、

そうした中で突如として、大きなパネル張りの写真がずらりと並び驚かされたことがあります。そこには亡き衣笠正氏のご努力がありました。このように、どの部門においても、どこかで誰れかが陰になり日向になつての励ましや支えがあつて、始めて盛会を見るようです。

衣笠氏はなかなか気骨のある方で、常に自分の見識を持っておられました。そういう衣笠氏をいつも陰で支えておられたのが志水祐助氏ではなかったかと思えます。

祐助氏は口数少なく、実践家でありました。私達は美術協会の事務局を押しつけ、会の運営からお金のやりくりまで、大変ご苦労をお掛けしたものです。また、展覧会が近づくと写真の現像から焼き付け、パネル張りや夜を日についての多忙さだったようです。その上、作品の搬入搬出は勿論、展示から片付けまで、何一つ不平不満を言うこともなく黙々と作業を続けておられました。

その祐助氏が十一月末に突然この世を去られました。美術協会にとっては本当に惜しい方を亡くしました。写真部にとっては尚さらの感が強いのではないかと思います。

最後になりましたが、祐助氏のご冥福をお祈りいたします。

新潮会と文化

新潮会
菅原 柁 夫

我々新潮会は、創立以来、本年で三十周年を迎えた。

自分の品性を高め、誠実にして良識のある町民として、まだ遅れている地域の文化を高めるという目的で発足した。

会員の構成は明治末期生まれが四名、あとは全部大正生まれで、大正デモクラシーの影響を受けて成長をしている。

会創立以来いろいろな文化的な行事を行って来たが、まだテレビが無かった時代だったので、文化人の講演に重点を置き、著名文化人を招聘して講演会をたびたび開催している。

その招聘した講師は、社会評論家嘉治隆一、同大宅壮一、フランス文学者辰野

隆、朝日新聞論説委員芹川秀雄、神戸新聞論説委員長畑専一郎、作家杉本苑子、同真野さよ、俳人中村汀女、歌人安田青風、同磯江朝子、詩人富田碎花、政治評論家戸川猪佐武、薬師寺管長橋本凝胤等約六十名近い講師を招いて、好評を得ている。

発足以来、欠かさず毎月一回の例会を開き、講師を招き座談会を催し、又は講話を聞いて、自己の研鑽向上につとめている。

昨年の講師は山崎町教育長前田昇氏、山崎西中学校教頭で絵画示現会会友の福岡久蔵先生、県立林業試験場長村上嘉宏氏、宍粟郡福祉事務所長笹倉幸二氏、山

中医院長山中陽一先生、文化連盟会長壺阪壽氏、山崎小学校校長山本喜教先生等で、各講師の講話は個性があり、大いに心に銘ずるものがあった。

新潮会は毎年一回、親睦旅行も行っている。昨年は十一月に四国と淡路を繋ぐ大鳴戸橋と徳島の大塚製薬見学の旅だった。

当番長の高井国男君らの計画で実行された。非常に特異な研修で、特に大塚製薬工場見学では、日本の生産工場が如何に近代化されているか、生産工程が如何にスピード化されているか、会員おのこの眼で確認して、日本産業の洋々たる前途を想い、感銘を受けた。

全日本チャンピオン

山崎囲碁同好会 高野 圭 介

全日本を制覇したお二人に登場してもらって、颯爽とした打ちっぷりをご披露したい。

昭和五十五年に城下の片山愛弘氏が全国青年大会囲碁の部に優勝し、昭和六十年に同じ大会にて一宮町の吉岡章雄氏が完勝し、同様に日本一となった。

仲間うちの碁会とか西播大会とか、あらゆるどんな碁会でも優勝となると大変なことだとは誰もがよく知っている。大会に出場するということは、一人を除い

て、皆負けに出るようなものだから。

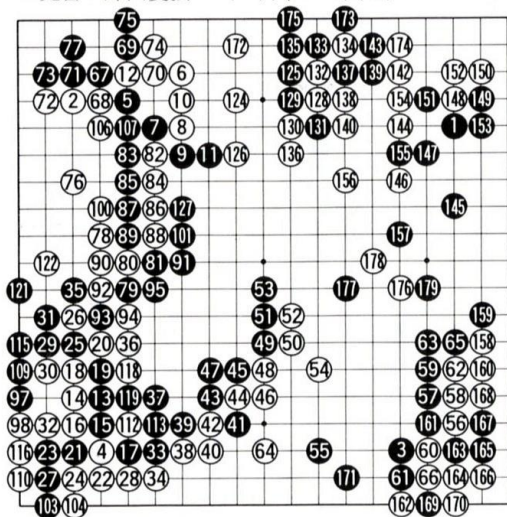
西はりま地区囲碁対抗戦や、緑の回廊中縦沿線対抗戦などが、春秋・冬夏と催されるのが昨今の恒例行事になっている。

二年前までは山崎町は一回戦ボーイに近かったが、今は全く違う。ヤングパワ―台頭のおかげで漸く優勝をなしとげ、昨年の阪神タイガースのような変貌を遂げつつある。県下の囲碁の中心が楕円形のフォーカスのように二つつあるならば、西の焦点は山崎に定着しつつあるのでは。

全国青年大会優勝記念対局

昭和60年11月24日 於楠風閣

- 互先 吉岡章雄
- 先番 片山愛弘 (5目半コミ出し)



96 トル(26) 99 劫トル(93)
 102 劫ッ 100 劫ッ
 108 劫ッ 101 劫ッ
 111 劫ッ 102 劫ッ
 120 劫ッ 103 劫ッ
 179以下略 黒3目半勝

冬 偶 感

茶華道協会

谷川柳秀

私は冬が好きだ。殊にお茶の世界では
炉開きの引きしまって気持のあらたまっ
た後、新年、また初釜に行事の間に自分を
しっかりと見つめ直せるのは冬である。

陽が落ちて、山の端を浮世絵の夕景の
如く紅がぼかして隈取りくまどりされているのを
窓に見て、一日のあわただしさが過ぎ、
夜に入って来られる客を待つ一刻いっせきの間に
炉中の火を直し、いただくお茶の手にす
る碗よりホノボノと伝わる暖かさや静か
さ、また風が戸に柝の葉を雨の様にあて
つつ雪をもつて来る宵、六尺の天地に自
分と釜と対峙し、釜の松風に外の風の音
がときどき和して、そそぐ湯より立ちの
ぼる湯気に困まっていた事や忘れていた
大事な事がフツと脳裡にうかぶ。これでは
いけないと座り直し身を正しくして釜
に向かうと、客のおとずれで我に還るま
で本当に無心になれる。

炉に向かい小間で行うお茶は、紙一枚
の動きにもその差が心に入ってくる。当
方の伝来の軸に、
「茶、一人神を得、二人趣を得、三人味

を得、七、八人皆茶を抱いだく」と
と言うのがある。茶は一人で対する時に
は神とも一体になりうる事もあり、客に
よってはその時々々に各々違った雰囲気
の楽しさを味わう事が出来るよ：

宅の茶室は丁度、峠の茶屋で、名ばか
りでも、春に近づく宵には水を割る様な
冷やかな寒気の中を、春をたずねる人々
のいとなみか、ワーンと言う様な潮ざい
の様な騒音が下から押し寄せて耳に伝わ
るのが、若い日に町に住んだ思い出と共に
に迫り、山の上が楽しい。

また、此頃、つくづくと身近なぐるり
を見廻す様になった。これも茶道に身を
よせ茶花に苦しむ内に、思いがけぬ人と
の出会いや花との出会いに、本当に色々
考えさせられ、その面白さや楽しさを一
人でも多くの方達にお伝えして、若い方
達のしっかりと自己を見つめ直してゆく
心をもてる様に、一緒にたのしみたいと
思う。

うれしいにつけ、悲しいにつけ、人の
集まるところ必ず口にする御茶。人の心を

和ませ安らぎをあたえてきた生活文化の
内、庶民のものにどっしりと根を下した
茶道で、今度は世の中の新しいさにはしる
風潮に、静かさとおちつきを今まで以上
に取りもどす一つの石になりたく思う。
この様な事を考えたり反省したりする
のも冬よきである。やがて葉のない山
の枝がボンヤリと霞み、何か赤みがほの
かにただよう様になれば、潮騒の様な音
は峠の茶屋までは上つてこず、一年が走
り去る様になる。

ごごみ

山崎文学会

北川泰子

ごごみ(クサソテツ)の味を御存知で
しょうか。塩ゆでにすると、淡い緑が美
しく、あくがなく、歯ざわりもよい、申
し分のない山菜です。

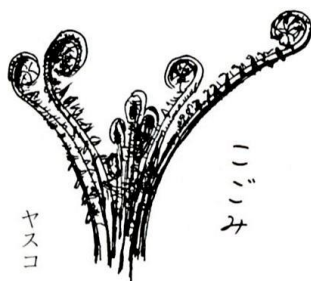
油いため、おひたし、あえもの、サラ
ダ、煮びたし、てんぷら、など、何にし
てもよく、昨年はゆでて冷凍保存してお
きお盆のごちそうに煮つけました。東北地
方では、塩づけにして年中重宝がるそ
うです。

ごごみは、山すそのせせらぎのほとり
から、かなり川下の川岸に至るまで、群
落をつくって生えています。

早春の頃、バイオリンのヘッドのよう
な若芽を一齐に萌え立たせますが、十五
センチぐらいまでが取り頃で、一週間も
すると伸び開いてしまつて、今年を取り
損ねたということになりかねません。

山菜は、すべて、取り頃を見はからう
ことが大切ですが、ごごみは特に、一氣
に伸びてしまう様に思います。

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づ
る春になりけるかも——志貴皇子
有名な歌だけれど、私の見る限りでは
わらびはもう少し乾燥した草地や山の斜
面に生えている。石走る滝のほとりや水
辺には、ごごみこそが生えている。と、
私流の理屈をこねながら、今年も取り頃
をねらっています。



ヤスコ

ごごみ



詩歌は時間に従属しない、これはさる文人のことではあるが、まこと人心の根にはえて滅ぶことのない詩歌こそ、私達日本人、いや大和民族にとって魂の声ともいえるでしょう。古今の名詩をひもどりやつながりを感じる時、われわれの貧しい経験を温め、膨ませてくれる師があり、友が居り、凡ゆる抵抗を押しつけて自在に熱い息吹をかよわせてくれるものです。

「愛なき人生は花なき園の如し」と言ったかの名句のとおり、詩歌の体温を通して聴きとれる素朴で美しい先人の声は、どんな流行にもまさる鮮度でしかも重厚にびったりと私達の肌に着く神秘であり、ましよう。またこれを黙読するのみでは、胃にもたれる感じと似ているが「吟ずる」「うたう」ことで詩のころ(精神)が五体に透って不思議な力となり、独特の日本人的風韻に充たされるのであります。

幕末の志士達に愛誦され、また国難に遭って人心の昂揚にえらばれた詩も少ないのであります。時にはもの

のあわれを、時には世情の緊急を自覚せしめて、吟詠もさればこそ日本の歩みに従って来た音楽なのです。

花鳥風月に親しむ詩は、和歌、俳句と同じに現在も多く作られているが、漢字の制限、国情の変移によって必ずしも盛んであるとはいえないが、吟ずる者はおそらく昭和前期・中期を凌駕しているといえるでしょう。掘り下げて学び、作者のところに感応してその詩を吟じ得るときこそ、祖先の積んだ業積や、悲願すらも、滔々たる地下泉の韻きとなつて、ゲエテの謂う「その時のみ永遠は汝と共にあろう」の幽玄境にさそわれるのである。

近代社会の発展から生活環境の変遷に伴って感じ方も変ってきたとはいえ、内面的には少しも変わっておりません。

私達は現在音楽を聴いてその悦楽を追うのみでなく、食事を味つてもその美味に酔うのみでなく、先人の遺心遺魂を耳に捉え舌に味つて、精神美の真の正しさ、善の安らぎ、美のよるこびを感じ、調和のとれた公私の生活をしてすこやかな社会と人生を創りたいものであります。

心の自然

山崎合唱連盟

Y O B

田中健一

昨年、コオロギやセミの鳴き声を電話で聞かすというちよつと変わった仕事をした時のことである。今までも聞こえた訳ではないが、それ以降、まあ虫やセミ達の声が聞こえること聞こえること。

会社から帰って車から降りると向いの山からセミの声が、そして一キロメートルも離れた山からも聞こえてくるのです。夕方裏の畑へ行くとコオロギ達の「虫しぐれ」こんなに鳴いていたとは知らなかった。虫達にすまない思いがした。入陽いま、川の真中に燃えつきて、やがて静かな流れに戻る。

さよつとちよつと、この歌今作ったけど、どうや!! と母が言った時、私は、掛保川のことかいな... と、これだけの会話だった。後日、この歌に対する評が「真つかな夕陽が丁度大川の真中に沈んでゆく情景を見つめてその川の流れを詠んだ歌で、作者は入陽が川に沈みかけてからしばらくの間、川端に立っているの

である。川の流れをよく観察し入陽が沈んだ後の静まってく川を適確にとらえている」...と。

私は子供の頃この掛保川が近かったのでほんとうによく遊んだ。夏休みの思い出などはみなこの川にあると言つてもいいくらい。でも忘れかけていた。まるで自然が全部無くなったかのように忘れかけていた。

仕事に追われた毎日、急ぐ通勤の車の中では、風の音も道端の虫の鳴き声も聞こえないだろう。コンピュータゲームの音を聞いている子供達も同じである。

今自然は失なわれてきているが、それ以上に自然を見る心が失なわれていたのではないだろうか... と自分自身反省した。

「虫」の事でいろいろお世話になつたり寺にある兵庫県立昆虫館の内海先生が言われた「今は、いろんな面で季節感が無くなった。食生活でも一年中トマトやキウリなどが食べられるし(香りも何も無い)、でも虫達は決して自然を忘れないし、自然とともに美しく鳴く」の言葉が今も心に深く残っている。

今でも時々昆虫館にお伺いするが、昆虫館が近づくと、妙に「自然」がよく聞こえてくるのである。哀愁をおびた河鹿の鳴き声などが。

編集長後記

編集長 根岸元彦

第五号を贈ることになった。普通の雑誌なら、ここで記念特集号といく所だが、そんな雑誌でもなし、お金も無いことから、そんな気も無しで特別の企画も無く、変わり映えのしないことで、誠に申し訳の無いことだ。まあ、十号でも出す時には、記念号を出すことも考えていいと思う。

ないない尽くしみたいなことだが、今回は林君の力作『西南の役異聞』を得て、冒頭を飾れたことは喜ばしいと思う。

実は前号の編集会議で、文学会の同人から、各個人への割り当ての紙数が中途半端で、思う通りの作品が書けないとの意見が出たので、皆で話し合った結果、文学会への割り当て紙数全部で、交替で誰かが思うだけの分量の作品を書こうということに決め、前号では浅田君が『いまいづこ』を書き、今回は林君が発表した次第である。

どうやらこの企画は成功した模様だ。この調子でいくと、今後ともまた新しい作品が発表出来るのではないかと思っ

て期待している。

それでも少し紙数に余裕があったので、随想を書かせてもらった。桜の花は私の最も好きな花の一つなので、いつか何かの形でまとめてみようと思っていたのでありがたかった。

今後共、山崎町内の文化人が意見の発表の場として、この小誌を舞台として頂くことを望んでやまない。

表紙画のことば

横江 柏峰

昭和四年、この校門から巣立った私、六年の時、北先生の指導で朝礼の集合ラッパをこの校内脇で毎朝吹いたのです。赤い房が印象深い真鍮のラッパ、地金が薄くなるほどピカ／＼に磨いた思い出があるのです。こんな小さなことがいつまでも私の心の中に生きているのです。不思議なことです。校内の周辺は殆ど取り除かれて昔の面影は何一つないが、せめてこの校門だけはいつまでも残したいものです。卒業生を代表してそんな願いで画いた私の感傷の画です。

山崎町文化連盟役員及び団体名

- | | | | |
|----|--------|-----|----------|
| 顧問 | 前野 四郎 | 顧問 | 伊藤 親登 |
| 会長 | 壺阪 壽 | 副会長 | 和田 秀男 |
| 理事 | 福山 清一 | 理事 | 杉田 清美 |
| 理事 | 藤井 慧乘 | 理事 | 福岡 久蔵 |
| 理事 | 伊野 操治 | 理事 | 秦 耕三 |
| 理事 | 尾崎 正明 | 理事 | 金井 信治 |
| 理事 | 谷川 道一 | 理事 | 塚本 重郎 |
| 理事 | 根岸 元彦 | 理事 | 朱山 清毅 |
| 理事 | 安井 清介 | 理事 | 藤村 省三 |
| 理事 | 田中 健一 | 理事 | 福田 栄三郎 |
| 理事 | 高野 圭介 | 理事 | 三宅 宏佳 |
| 理事 | 安井 克典 | 理事 | 菅 元 栄夫 |
| 理事 | 菅 元 栄夫 | 理事 | 荒木 俊介 |
| 理事 | 三浦 昭平 | 理事 | 北川 智恵 |
| 理事 | 長川 耕一 | 理事 | 根岸 元彦 |
| 理事 | 長尾 良彦 | 理事 | 藤村 清一 |
| 理事 | 南 ちたか | 理事 | 和田 秀男 |
| 理事 | | 理事 | 北川 泰子 |
| 理事 | | 理事 | 藤村 省三 |
| 理事 | | 理事 | 安井 道夫 |
| 理事 | | 理事 | (アイウエオ順) |

山崎銘菓 さつき

さつき本舗

山崎菓子株式会社

電話 (0790) 62 - 0170




飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」なるものにたどりつき、自作自演で20数年を歩いて参りました。46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、それを無限のエネルギーとして全社掲げて取り組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければならないと常に進言し、流通の世界の中で使命感に燃え、生活文化の向上を願って多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

〈飛石農機部〉〈トビイシ住設部〉〈飛石建機部〉〈飛石レンタ・リース電野〉

◆最新型カラー現像機導入◆
 カラープリント・スピード仕上げ
 良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

山 交 タ ク シ ー

山 崎 神 姫 バ ス 西 隣
 電話 0790-62-2166(代表)



幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 ☎ (0790) 62-0052

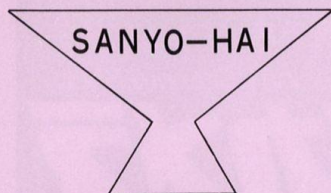
たしかな技術で世界をむすぶ

NEC

兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地 ☎ 播磨山崎 (0790) 62-1222代

登録商標



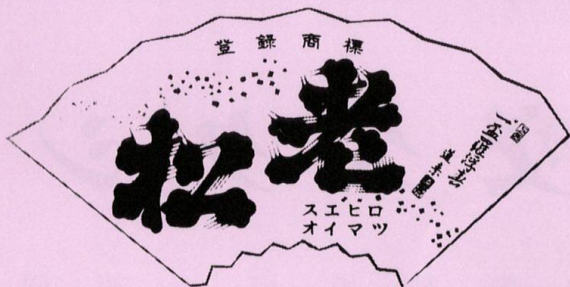
山陽
盃

高級清酒

名
轟
四
海
聲

兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限公司

登録商標



兵庫県山崎町 老松酒造有限公司

地元ひろがる
心のふれあい

にしん



西兵庫信用金庫

理事長 杉元清美